紅花ルネサンスvol.1 山形→未来

Tohoku University of Art and Design Textile Course 2008

辻　けい
TSUJI Kei

山崎　和樹
YAMAZAKI Kazuki

山形の雄大で豊かな自然環境をバックボーンとして「生きられるアートへのチャレンジ」をテーマに、自然と芸術が循環し、様々な素材発見の実験場としてテキスタイルコースがあります。織り・染めの伝統的手法はもちろんのこと、紅花・藍などの植物染料を種から栽培する天然染色にも力を入れ、身体考察やフィールド・ワークの手法を取り入れたカリキュラムで、さらに想像と創造を高めた作品制作を目指しています。

2008年度４月より種から栽培した「紅花」が、敷地六十坪に四千本が育ち、一万数千の花を咲かせました。学生・教職員が多数参加し、また紅花産地である山形市高瀬地区からも指導者を招き、花を摘み、紅餅にしました。その紅餅（総量1.5kg）を使用し、2009年2月寒中に〈紅花染め〉ワークショップを実施。また、『紅花ルネサンス』として、今後の大学の方向性を討論するため、著名な研究者、染織家、紅花生産者を招き、シンポジウムを開催しました。

紅花ルネサンスvol.1　山形→未来

2009年２月４日（水曜日）　９：00～16：00

【ワークショップ】　会場：東北芸術工科大学敷地内グラウンド
９：00～12：00

【シンポジウム】　会場：東北芸術工科大学こども芸術教育研究センター内こども劇場
13：00～16：00

【講演者・出演者】　吉岡幸雄（染織研究家・染司よしおか当主）
山岸幸一（染織家・日本工芸会正会員）
石山信哉（山形市高瀬地区　産地直売所たかせ代表）
緒方せい（山形市高瀬地区　産地直売所たかせ）
大内理加（山形県議会議員・山形県紅花生産組合連合会顧問）
赤坂憲雄（東北芸術工科大学大学院長・同大東北文化研究センター所長）

【進行】　辻けい（東北芸術工科大学教授・美術家）
山崎和樹（東北芸術工科大学准教授・草木染研究所柿生工房主宰）
中島洋一（東北芸術工科大学非常勤講師・古典織物研究家）

【特別展示】　紅花染　振袖　　協力：新田英行（株式会社新田代表取締役社長）

2008年４月17日（木）
紅花種蒔き
石山信哉氏（高瀬地区）、工芸教員、学生参加（約100名）
鍬入れ式（石山氏）、工芸教員から種蒔き開始

同時に、もう一つの染料植物「藍」の種まき
夏場に収穫し、生葉染めと沈殿藍つくりを体験する

2008年５月初旬
紅花発芽

2008年５月29日（木）
紅花間引き・藍の植替え
こども芸術大学の児童16名参加
テキスタイル４年生による紅花の間引き・藍の植替え
藍の苗をこども芸術大学へ寄贈

2008年６月６日（金）
紅花の支柱たて作業・スプリンクラーの設置
茎が倒れないように支柱をたて、棕櫚紐にて誘引
藍畑に簡易スプリンクラーと水まき用ホースの設置作業

2008年６月30日（月）
「半夏のひとつ咲き」
予定の半夏生（７月１日）には１日早かったものの
一輪の紅花が咲く

2008年７月７日（月）　紅花採取１日目
今現在、満開な花を採取⇒洗わず空気にふれない状態にして冷蔵庫にて保存
（７月10日まで）⇒3000ｇの紅花を採取

2008年７月８日（火）　紅花採取２日目
テキスタイル４年生との紅花採取
採取量＝1755ｇ

2008年７月９日（水）　紅花採取３日目

2008年７月10日（木）
紅花収穫祭
紅花朝摘み・紅餅作り開催（紅花採取４日目）
松本哲男学長をはじめとして、
工芸コース・彫刻コース教員と学生達、
こども大学の子供達
事務局の方々多数参加のもと開催
山形新聞社、河北新報社、山形放送（YBC）、テレビユー山形（TUY）取材
摘み取りから紅餅作りの第一段階まで
⇒一昼夜寝かせ発酵後「紅餅」へ
※紅花：延べ面積60坪に約四千本、一万数千の花数

2008年７月11日（金）
紅花摘み（紅花摘み５日目）

４年生主導で２年生への紅花摘み・紅餅作りの指導
摘んでから紅餅までの一連の作業を指導

●紅餅作りの工程

①摘んだ紅花の花弁を水で洗う（流水）
②足で踏んで黄色の色素を出す
③臼に入れ杵で搗く（搗いている内に水（黄色）が出るので、ギュッと搾ってまとめる
④一昼夜寝かす（紙袋で覆って蓋をして寝かす）＝発酵（黄色⇒赤）
⑤小分けに丸めて花筵に置き、上から板を被せて足で踏んで拡げる
⑥それを天日干しして完成

2008年７月12日（土）
紅餅の保存（１日目）

７月10・11日分の紅餅を天日干し後、乾燥したものは、冷凍庫へ保存

2008年７月14日（月）
紅餅乾燥・保存（３日目）

収穫量：1000ｇ
※紅餅にしたものを乾燥⇒紅餅全量＝約1500ｇ以上

2008年８月８日（金）

紅花種摘み作業①

全紅花を引抜き作業

2008年８月18日（月）

紅花種摘み作業②

お盆中の長雨の為、紅花にカビが発生

⇒午前中は天日干し乾燥⇒脱穀開始

米袋一袋分⇒しばらく陰干ししてしっかり乾燥させる

2009年２月４日（水）
「紅花ルネサンスvol.1 山形→未来」開催

ポスター・チラシデザイン協力：グラフィックデザインコース　大竹左紀斗准教授
板垣裕香／安孫子主弥／富樫祐介（２年生）

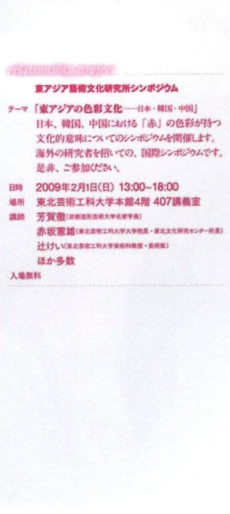
ポスターモチーフ写真：「半夏（はんげ）のひとつ咲き」（2008年６月30日 柳田哲雄撮影）

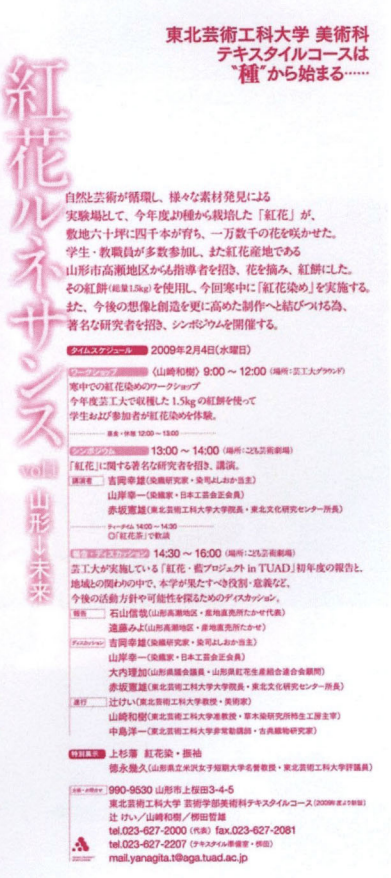
半夏（はんげ）（半夏生（はんげしょう））とは、夏至から11日目、新暦で2008年は７月１日にあたりますが、本学の畑では一日早い６月30日に咲きました。

その時期に紅花が一輪だけポッと咲くことを、昔の人はこのように表現し、これを境にして紅花は次々と咲き始め、畑を紅黄色に染めると言われています。

「夜明け前だよナ 紅花摘みのよ」～紅花摘み唄より～

紅花の茎やガクに伸びている棘は、早朝の露で柔らかくなり、痛みを防ぐという意味と、紅花独特の紅味がかった黄色は「咲き始めの色」で、次第に紅色に変化してしまいます。染料や口紅等の原料としては咲き始めの色が良いとされているので、早朝の摘み取りが適しているとされています。





【ワークショップ】

学生、教職員、こども芸術大学の生徒、山形県内外の草木染愛好家など約100名が参加して、雪が積もる本学グラウンドで紅花ワークショップは開催。学内で栽培した紅花から作った紅餅（1kg）と市販の紅花（4kg）使い、紅花染（黄色染、紅染、桃染）を行った。

（染料の抽出）

紅花は、水に可溶な黄色色素と灰汁（アルカリ）に可溶な紅色素を含む。紅餅1kgを水に一晩浸してから、黄色色素を抽出。さらに、灰汁に一晩浸し、紅色素を抽出した。

紅餅（黄色色素抽出）

（黄染工程）

染色→明ばん媒染→水洗→
染色→水洗

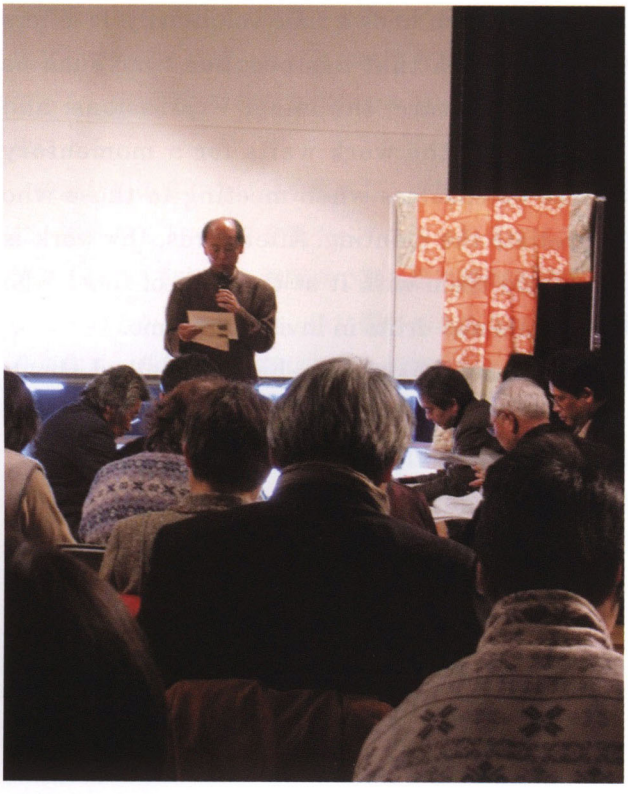
（紅染工程）

烏梅で紅色素液を中和→
染色→酢に浸す→水洗

（桃染工程）

①紅木綿染
烏梅で紅色素液を中和→
木綿染色→酢に浸す→水洗
②紅色素を再抽出して染色
紅木綿を灰汁に浸す→
紅色素再抽出→烏梅で中和→
染色→酢に浸す→水洗

黄色染

紅木綿から紅色素再抽出

【シンポジウム】参加者：約100名
こども芸術教育研究センターこども劇場
講演内容：吉岡幸雄氏『古代紅花の道』
山岸幸一氏『織物と紅花』
紅花栽培、紅餅生産の現状と未来、大学と地域との連携、役割などを討論。